



竊木清方の明治期の代表作《嫁ぐ人》(明治40)。中央の女性の特に婚礼で好まれた高価な白べっ甲り髪飾り、輸入品であろうダイヤモンドをちりばめた菱形の指輪は申し分のない結婚を物語る。首掛式時計鎖をしている右隣の女性は、リボンをしているところから女学生と思われるが、彼女のルビーの指輪はすでに婚約していることを示唆しているのであろうか。後ろ姿の女性の帯には孔雀、着物の裾には飛翔するソバメの群が描かれている。洋装化への反動の時代にあつて、アール・ヌーヴォーの影響は和装の中に取り込まれたのである。鎌倉市竊木清方記念美術館蔵